

「生活モデル」視点からみる高齢者住宅の課題

Important Topics Concerning Residences for the Elderly based on the “Life-model” View

永田 志津子

NAGATA Shizuko

Rental unit residences for the elderly with on-site social workers have been on the increase. As far as residences have been concerned, until recently precedence has been put on facilities and maintenance, while less thought has been given to lifestyle and quality of life from the point of view of residents.

With this in mind, ten residents of residences for the elderly in Hokkaido were surveyed. This paper describes the following viewpoint made clear from interviews with these ten residents, based on the “Life Model” concept:

Residents place more importance on rental and living costs, as well as ease in family visitation. They also tend to feel at ease with their relations with staff after entering the facilities, however, communication with the facility does not seem to progress beyond this. The elderly residents also feel that they and their visitors need a system that allows them to be able to come and go more freely in order for them to create a community.

はじめに

高齢化の進展に伴い自宅での生活から、安全、安心を求めて高齢者住宅に移り住む人々が増加している。「高齢者の住まい」といえるものは、一般の賃貸住宅から公的側面の強い介護専用の居住施設まで多様である。平成 23 年からは高齢者向けの賃貸住宅として「サービス付き高齢者向け住宅」(以下サ高住)の登録制度が開始されると建築数は年を追って伸び、現在では高齢者住宅の代表ともいえるものとなっている。サ高住では、入居条件に要介護度を限定するものから、昨今では看取りまでを謳

うものがあるなど入居基準は幅広く、介護に限定するというならば従来の介護付き有料老人ホームや特別養護老人ホームに匹敵する機能を持つものも現れている。介護の要・不要によって選択されることが多かった高齢者住宅であるが、厚労省による「早めの住み替え」の推奨^①もあり、元気な段階からサ高住へ移り住む人々もみられるなど、今日では高齢者住宅の入居者層は非常に幅広いものとなっている。

わが国では伝統的に家族介護が規範化され、高齢者のみが居住する住宅の開発と整備は諸外国に比較して遅れていたが、高齢化の進展と小家族化により家族介護の限界が表出し、高齢者住宅における法整備が加速されたといえる。しかしその内容はハード面における登録基準の整備が中心であり、虚弱な高齢者が日常生活を営む場としての支援を伴う整備は進んでいない。国はサ高住に該当する住宅の登録を推進しているが、基準を満たさないなどの理由から登録に至らないいわゆる高齢者下宿や共同住宅もあるなど、高齢者の住まいの実態はいまだ明らかとはいえない状況にある。自治体では地域包括ケアシステムの取り組みが進んでいるが、住まいと生活は一体のものであり、長期化する高齢期の生活の受け皿としての住宅の有り様を早急に検討すべき時がきているといえよう。

1. 目的

一般の賃貸住宅では、住戸の設備等の管理に関しては建物所有者や管理者の責務となるが、日常生活の営みは入居者責任であり管理者等とは関与しない。高齢者住宅ではこの点において相談員あるいは管理者が対応する点で異なる（高齢者住宅のうちサ高住では、状況把握と生活相談が基本サービスとして付帯される）。サ高住をはじめとする今日の高齢者住宅は、一般の集合住宅と大きく異なり、各住戸(居室)は賃貸借契約に基づく個人管理の生活空間であるが、安全や緊急時の対応など高齢期生活の不安要素への対応が第三者によるサービスとして提供される。しかし

サービスの範囲や提供方法に関する規定がなく、入居者、サービス提供者共に手探りの状況にあり、高齢者にとってはこれまでにない未知の生活空間ということができる。

高齢者住宅の中心となるサ高住については、登録制度の開始以来、その実態に関して研究がすすめられたが、入居者の身体状況、職員の配置などの現状把握あるいはビジネスモデルとしての可能性など事業者側の視点に立つものが先行している段階にあり⁽²⁾、虚弱高齢者が日常生活を営む場としての側面からの検討は少ない。介護を視野に入れながら、入居前から入居後へと継続する生活の主体である入居者視点は後回しになっていたといえよう。今日の高齢者住宅は元気なうちからの入居もあり、既存の有料老人ホーム等に比較すると生活の場の色合いが濃いと思われ、今後の高齢者住宅の方向性を考える上では、入居者の「生活モデル」視点に基づいて住宅の課題を探ることが不可欠と考えられる。

本稿はこうした観点から、高齢者がどのような状況下で何を求めて入居に至り、高齢者住宅においてどのような生活を営もうとしているのか、またそのために住宅に求められるものは何かを探り、望ましい高齢者住宅の在り方を考察するものである。

2. 高齢者住宅入居者を対象とするインタビュー調査

2-1 調査方法

平成 26 年 10 月から平成 27 年 6 月に、札幌市および道東 K 市における高齢者住宅の入居者 10 名に対するヒアリング調査を行った。調査対象者の概要を表 1 に示す。

対象者の要介護度は、「自立」2 名、「要支援 1」3 名、「要支援 2」1 名、「要介護 1」2 名、「要介護 2」2 名であり、要介護度は低い。調査は半

構造化面接とし、対象者の半数は生活相談員または住宅管理者が同席する場で実施した。なお調査にあたり、倫理的配慮として、調査の趣旨に

表1 調査対象者の属性

調査実施日	調査実施日	住宅種別	所在地	氏名(仮名)	性別	年齢	要介護度	入居期間	疾病等身体状況	通院	利用サービス	家族		その他
												入居後	入居前	
平成26年 10月17日	1	サービス付き高齢者向け住宅	札幌市	須藤京子	女	75歳	要支援1	2年	既往症により腰が悪いが治療中の疾患はなし	なし	なし	独居	未婚、独居 姉弟3人(市内・道央) 自宅売却	道央の他市から入居 自宅売却
平成26年 11月1日	2	介護付き有料老人ホーム	札幌市	葉島康子	女	84歳	要支援1	5年	ひざが痛い 高脂血症 高血圧、糖尿病	通院 2回/月	介護付き住宅のため非該当	独居	夫死亡後独居 姉家族 (市内)・(東京)・(東北)	向市内に居住 退院後入居 自宅売却
平成26年 11月14日	3	サービス付き高齢者向け住宅	札幌市	富田正	男	86歳	要支援2	11ヶ月	既往症 脳梗塞数回	通院 2回/月	なし	独居	妻死亡 次男家族(近隣市)と同居	相談員同席 退院後入居
平成26年 11月18日	4	住宅型有料老人ホーム	札幌市	入間三郎	男	78歳	自立	4年2ヶ月	なし	なし	なし	独居	妻が先に同系列の住宅に 入居後死亡 子どもなし、兄弟死亡	市内に自宅マン ションあり
平成26年 11月27日	5	高齢者共同住宅	札幌市	那須野美子	女	80歳	自立	3年	なし	なし	なし	独居	夫死亡後独居 長女家族(近隣市) 長男(本州)	管理者同席 自宅売却
平成26年 11月28日	6	サービス付き高齢者向け住宅	札幌市	寺岡隆	男	75歳	要介護2	1年8ヶ月	既往症 腰部大動脈瘤	通院 1回/3ヶ月	小規模多機能	独居	夫婦同居 長男・次男近隣に居住	相談員同席 自宅売却 妻はマンションへ 退院後入居
平成26年 12月2日	7	高齢者向け下宿	札幌市	朝日照子	女	85歳	要支援1	2年9ヶ月	障害認定(脳・膝)	通院 1回/月	なし	独居	長男家族と同居(市内) 長女家族(市内)	生体利用
平成26年 12月16日	8	サービス付き高齢者向け住宅	札幌市	小川留子	女	87歳	要介護2	2年9ヶ月	ひざが痛い 車イス使用もあり	訪問診療 2回/月 訪問介護 3回/週 訪問リハ 1回/週 通所介護 3回/週	なし	夫先に入居後死亡 現在独居	夫死亡 姉家族(市内)	管理者同席 近隣市から入居
平成27年 5月7日	9	サービス付き高齢者向け住宅	道東市	野町優子	女	81歳	要介護1	1年3か月	心不全 高血圧	高血圧で通院	訪問介護 2回/週 通所介護	夫婦同居	夫婦同居 長女(道央) 長男(道東)	ケアマネ同席 向市内から入居 自宅売却
平成27年 6月9日	10	サービス付き高齢者向け住宅	札幌市	安藤洋子	女	89歳	要介護1	1年4ヶ月	高血圧	通院 1回/月	訪問介護 1回/週	独居 姉別室	夫死亡 長女家族(市内) 長男家族(本州)	市内に自宅マン ションあり

ついて説明をし、質問に対する拒否が可能であること、研究以外の目的には使用しない事、個人が特定できないよう十分な配慮をすること等を説明し承諾を得た。調査時間はそれぞれ1時間から1時間半であり、調査実施場所は対象者の自室またはホール等であるが、ホールを利用した場合には、他の入居者から距離を置く場所とした。承諾を得て録音した後逐語録データを作成、さらに回答に影響を与えない範囲で若干の加工を行っている。逐語録データから、入居者が高齢者住宅に求めるものを抽出するため、入居の経緯、住宅への期待と評価、入居後の生活と意識の変化、住宅内の新たな役割の自覚とコミュニティの形成、入居費用と生活費に分け分析した。

なお、高齢者住宅の定義は定まっていない^③が、本稿では「60歳以上を対象とする、自由意志により選択される住まいであり、介護サービスの利用以外の場面において、生活の自己管理が可能な住まい」とし、サ高住(6ヶ所)を中心として介護型有料老人ホーム(1ヶ所)、住宅型有料老人ホーム(1ヶ所)、高齢者共同住宅(2ヶ所)に居住する高齢者を調査対象者としている。

2-2 インタビュー調査の結果

2-2-1 入居の経緯

高齢者は住み慣れたこれまでの住宅に住み続けることを望み、介護サービスを使ってできるだけ長く現在の生活を継続させたいと願っている^④。そうした思いを持つ高齢者が高齢者住宅への入居を決意するに至る過程を入居者の語りからみていく。

入居の経緯は3つに分類される。(1)は自身の身体の衰えが原因で、従前の住居に住まうことが困難となって転居に至ったケースであり、疾病等による入院と退院が直接のきっかけとなっている。(2)は家族や親

族の入居をきっかけとして自身も入居するケースであり、本人に先んじて配偶者や姉妹の要介護問題が起こっている。(3)はさらに独居の寂しさ、介護は不要だが生活上の小さな支援を要する状況、また家族関係の悪化による入居である。以下にこれらの語りを見て行く。氏名はすべて仮名である。(寺岡さん、富田さん、須藤さんの事例は、永田(2015c)より一部再掲)

(1) 入居者自身の退院をきっかけに入居したケース

寺岡さん(75歳男性、要介護2)は半年の入院を経て奇跡的に回復し(生命の危機を脱したということであり、室内では杖を離せない)そのまま高齢者住宅へ入居した。妻は持病があり一軒家での独居は難しくマンションに移り住むこととなり自宅は処分した。

○大のケースワーカーさんに紹介してもらって、私体壊してたのでその壊れてるのが順々に北大の先生方わかってて、私の事を気にかけてもらっていたので、○大のケースワーカーの方がこちらを。私も鬱の薬を飲んでたから私もはっきりしてないんですよ。……雪どけ(雪除け)しないと住めない家だったから、雪どけ出来ないからもう壊しちゃったの、そしてマンションに一人暮らしして。 (妻談)

簗島さん(84歳女性、要支援1、高脂血症や糖尿病の持病あり)は配偶者を数年前に亡くし独居だったが、本人と子どもの判断で退院後に入居した。

21年のちょうど、秋ごろにね、ちょっと、おなかを壊して、吐いたりなんかして、病院に運ばれましてね。そして、1か月くらい入院して、ここでは一人で生活するのが無理だって判断、子供たちもしましてね。そして、ここへ施設があるのでって。

富田さん(86歳男性、要支援2)は次男夫婦と同居していたが、脳梗塞を数回わずらい数カ所の病院へ入院した後、病院の紹介で現在の住宅へ入

居している。長男は若くして病死し、次男家族は自営業で忙しい。

だけど〇〇会ではどうとう、あなたの病気はこれ以上ね、私のところではその、あの、手当の仕様がなから、退院してくださいって言われたんですよ。それで、行けるところがないんで、息子にその、あの、医大行って連れてもらった。あちこちにこう、あの、2、3か所歩いたんですよ。それで、わかんなくて、最後は△△会(現在の住宅の経営主体の病院)の、先生に、助けられたので。

(2) 配偶者、姉妹等の介護がきっかけとなって入居したケース

配偶者や姉妹が先に要介護状態となり高齢者住宅に入居、本人は付き添いや入居した配偶者の介護に通うことが負担となり続いて入居するケースである。入間さん(78歳男性、自立)は、妻が認知症の症状の悪化により先に介護型の有料老人ホームに入居、その後自分も同系列の住宅型有料老人ホームに入居した。自分の疲労と妻を見舞うのにも便利なためである。子供はなく、自身も末子でありすでに他の兄弟は他界している。また妻の兄弟もすでに他界し身内は甥が1人いるのみである。入居前は自宅で入間さんが1人で妻を介護していた。

それで、僕は体の方が参っているし家内の状態は年々ひどくなってきて。で、特養に入れようかと思ったんですけどもね。その、その時に、ここの△△関係の□□が介護付きのホームですか。僕何で見たのかな。おそらく新聞にその設立のお話が〇〇年に出たんですよ。で、その、こっから近いから、これだけやってくれるんなら、僕もここの□□(系列のホーム)に入って、そして家内の見舞いをしようかなと思って。そのほうが便利だろうと思って。そしてここの入居することにして2010年の9月1日にここに入居したんです。で、本当は僕もここ必要ないんだけど、でも、みんなよくやってくれるし、もう一人で××に住んでも仕方がないからと思って。で、ここでずっとお世話になります。うん、それも、いや、あの、結局家内の近くだったということと……。

安藤さん(89歳女性、要介護1)は姉が認知症を伴う要介護状態で入居し、

夫を亡くして長い間独居だった自分がその世話をするために少し遅れて同じ住宅に入居した。

姉の事でここに入ったの。姉の事考えたらかわいそうで、姉の所に何か月も通いましたもの。毎日のように通いましたね、こんな生活していたら大変だと、お母ちゃん倒れてしまうと。それで探して、子供の所にも姉と同じ年の年よりが居て、娘が一生懸命探して。姉が心配で、子供たちが姉を先にいれたんです。

小川さん(87歳女性、要介護2)は多くを語らず、同席した管理者が入居の経緯を話した。夫が先に入居し、その後妻も入居、夫はその後死亡した。小川さんは訪問介護を利用しながら一人暮らしであったが、自宅の段差や商店が遠いことから独居を続けることが困難となった。先に入居した夫は、住宅が看取りまで行っている。小川さんは一人の時には買い物も不便で寂しかったという。

「ご主人が先にいらして、その半年か1年後に智子さんがいらした。□市にいらして、ご主人が胃瘻にされて状態が重いのでうちにいらして、智子さんはヘルパーの助けを借りながら頑張っていたんですよね。□市と札幌でご家族が、おかあさんが大変でということで、ご夫婦一緒にとこちらへいらしたんです。」(管理者談)「(入居については)全部娘してくれたの。」(智子さん談)

野町さん(81歳女性、要介護1)は、夫が高血圧で倒れたこともあり、不安が募っていた。また夫の世話をしながらの夫婦2人暮らしを妹弟が案じて入居に至っている。

じいちゃんが体が弱いというか血圧高くてね、倒れて。妹弟が2人で暮らしているの無理だからと、妹が探して。段差も昔立てた家だからありましたけど、倒れたりがおっかなかったのね、血圧と。

(3)独居の寂しさや家族関係をきっかけとして入居したケース

介護は不要あるいは軽度だが、独居の寂しさから入居を決めるケースである。また複雑な家族関係の問題から転居が望ましいと判断しケアマ

ネに相談しての入居もみられた。さらに過疎地で独居に限界を感じ、姉弟の近くへと転居を決めたケースもある。住み慣れた地域であっても親族、家族が近居でなければ自宅に住み続けることは困難であり、また過疎地では高齢者向け住宅は少なく馴染みの環境から移動せざるを得ないのである。1人になった親を案じて子ども達など家族が高齢者住宅を探して手続きをしている。

那須野さん(86歳女性、自立)は、住宅を拠点として習い事に通い時折訪問する娘と外食を楽しむ元気な女性である。入居している高齢者共同住宅は、入居者数も少なく普段は他の入居者との交流も楽しんでいる。

やっぱり一人暮らしは寂しいからだね。いつもね、うち直してこよう、直しにくる人がね、そのひとのあれです。ここの(この高齢者住宅の)隣建てた人だったんです。娘とその人と3人で見に来たんです、もう3回目ね、決めちゃったもんね。

須藤さん(75歳女性、要支援1)は過疎地で自営業を営んでいた。子供の頃の病気がもとで腰が悪いが治療中の病気はない。札幌に住む妹が探し入居に至った。

手がね、あの、悪くしちゃったんですよ。両方の手がね、それでお料理ができなくなってね。

そして妹、体調が悪くなったから、どこかいいところないかなと思ってね。一軒家に住んでもなかなかね。大変だからこういうところ入っていいんでないかなーと思ってね。・・・そうです、そうです。兄妹がね、いますからね。探すのはね、あの、妹が探しました。妹がね、妹と妹の旦那さんと二人で、探しました。うん何かね、5か所ぐらいでないかなーと思います。お金も、手頃だし。居やすいしね。なんか感じもよさそうだし。そうです、そうです。(妹が)来やすいところですね。

朝日さん(85歳女性、要支援1)は複雑な家族関係を担当のケアマネージャーに漏らしたことで入居に至った。高齢者住宅への入居は、家族同居

が望ましい形ではない場合、救いの道となることもある。

Cさんてあのケアマネージャーさんがいらして下さったときにどうしようかな、どうしようかなって常々考えていたことをちょっとふっとね言葉に出て、私も今、状態がねちょっと嫁さんとも折り合いが合わないし居辛いからね将来考えているんだってことで、私あんまり人に言わなかったんだけどもCさんにちょっと言ったらCさんがそれじゃってね、いろいろと（聞き取れず）話して下さってそれでね急遽ね、私もこれに決めようって思ってね、息子にも誰にも相談しないで自分で勝手に決めて、そしてこちらに来ることにしたんですよ。

2-2-2 住宅への期待と評価

終の棲家となる確率の高い住宅の選択は高齢者にとって大きなかけのよなものである。特に自宅を売却して移り住んだ場合には満足できるものでなければあきらめ以外の方法を持たないこともある。高齢者は住宅の選択にあたり何を重視するのであろうか。

まだ介護は不要な人間さんは、認知症の妻の介護をしながらも客観的に住宅のコンセプトを分析している。

いや、あの、結局家内の近くだったということと、それからその、設立の趣旨っていうかな。それが、うん。ほかとはちょっと違うんでないかなという。…で結局今までのようなあの、介護施設とは飽き足らなくなって。それで新しいコンセプトみたい、もうみんなでその入居する要介護者をどうやっていくか考えながらやっていくという僕もその趣旨が気に入ったもんですからね。

また住宅が経営戦略をもち広告を行っていることを鑑み表面だけで選択する危険性を指摘している。限界状態で時間的余裕がない中で選択したものの結果的には良い住宅に巡り合えたと語るが、状況が落ち着き客観的に見ることができる現在では、高齢者住宅を選択することは難しいと感じている。入居してみて納得がいかないものであれば退去もあり得ると想定して、元の自宅に戻ることができるよう自宅はそのままにしてあ

ると語る。

サ高住だって玉石混交ですからね。だから怖くてとてもじゃないけどもう入ってどうなるんだ。今考えてみたらね。やっぱり、今からサ高住どうのこうのっていう選べたら僕選べないなあ。できないですね。うん、だって悪いこと自分たちで言わないんだから。もう宣伝はいいことばかりだから、よっぽど契約書の内容よく読んで、そしてその住んでる人からもし情報が入るんならば入れて、そして決めなければこれ大変なことになるなあっていうのは・・・だからね、僕はあの、保険のひとつみたくに〇〇(自宅のある地域)においてあったんですよ。ええ。ここの様子を見て実際に経営状態とかそれから職員の質とか。そういうものがもし、気に食わなかったらどうせ〇〇だけは残しておかまきゃならん。

蓑島さんは子どもと相談し自分で3ヶ所見学した後に決めている。入居後の自分の行動範囲や周囲の生活環境も考え、納得のいく現在の住宅に決めた。自分の生活の場であるとの意識は高く、買い物行動、窓から見える景色、西日の当たり方、間取りなど、入居後の暮らしを想定し決めている。介護度が低い場合は、介護が入居の優先事項ではなく日常を生きる生活者としてのニーズが重視される。

3ヶ所歩いたんですよ。そうしまして、交通の便がここはいいしお店も近いと思ひましてね。なんか、住宅街にあるのがあったんですよ。そしたら何か、いや、お店もなかったらつまらないな—とったりね。そんなことで、だからあの、〇〇のほう行ったらなんか電線がすーとこう窓開けたら電線が。それでなんか見晴らしがよくないなあと思ったりね。トイレと洗面所が一つでセットになってる(聞き取れず)ここは別々ですからね。そういうの嫌だったし、それで、ここにしました。

安藤さんは、これまでの広い一人暮らしの住まいから限られたスペースの住宅に転居して自分が順応してやっっていけるかに不安を残している。

元のマンションはまだある。離そうと思っているけどなかなかね。荷物は処分

したけど、仏壇とこれだけでもって。いつかはこうなりますものね。でもやっぱり不自由です。広い所で好きにしてきたので。

那須野さんは住宅に庭があり、自由に使えることに魅力を感じて入居を決めた。しかし介護度が重くなった場合について尋ねると「やっぱり施設に入ると思いますよ」と言う。

ここは庭があるからねそれで決めたんです、一番ね。野菜作ったり出来るからそれがまた魅力なのね。

須藤さんは介護職員の勤務ぶりを評価しながらも、介護度による入居の限界と、高齢者住宅としての生活の限界を認識している。

うん雰囲気はいいですよ。ヘルパーさん方もみんないい方ですし。全員みんな頑張ってる姿見るの私好きなの。みんな働きますよ。一生懸命にやっていますよ……。ここはあんまりいられないですよ。長くね。ひどくなるとね。ひどくなったら、また違う病院回される。うん。一生懸命もうね、仕事に打ち込んで。じっと私見てきましたからね。やっていますよ。でもこういうとこってね、あの、やっぱりね、病院と同じ扱い方です。うん、家庭的なところはないですよ。やっぱりきちっとしてるからね。一切ね、融通はききません。こういう風にしてほしいなと思っても、一切それはなしです。

2-2-3 入居後の生活と意識の変化

入居者は、入居前の生活と比較して入居後の生活に満足していると語る。入間さんは認知症の妻への長期間にわたる介護が終わり、高齢者住宅で独居となった現在を次のように語り、野町さん、那須野さんも心持が明るい方向へ変化したことを語る。

今、ああ、何となく落ち着いたなっていう。ええ。くぐり抜けてきたなあと思うね。結局、〇〇に入所してからは別にもう、言うことはなかったですね。(妻の最後の、葬儀のことなども私の言うとおりにしてくれましたからね。みんなですやってくれましたから。(入間さん)

家こっちにきてからはみんなが居るから楽になりました。気持ちがね。(野町さん)

一番いいの、やっぱり皆といるからだね、一人じゃないからね。(那須野さん)
朝日さんは家族関係の問題から高齢者住宅に移る決意をしたが、家族への気兼ねがなくなった今の暮らしが一番幸せだという。

精神的ですねやっぱり、もう何にもね考えることもないですし、いろいろお世話になってるわ全部なんというか、全面的に頼りにしてる、一番私、幸せのときですね、うちにいますとねいろいろと精神的な苦痛がありましたからね、だから今なら本当に娘にもゆってるんです、何にもご飯食べさせてもらってお風呂入れさせてもらって何にも気兼ねなくねここにいさせてもらってお国に助けてもらおうのもったいないような気がしてね、そういうことにならないようって頑張ってる若い頃はね頑張ってきたんですけども人生ってころっと変わるもんだなって思ってね、思ってもないようなね。色々して下さるもんですから、それで今すごく楽しいですよ、私死ぬまでここでねお世話になろうって思っています。

住宅の職員から受けるサービスに感謝しながらも、入居後の生活の変化に戸惑う入居者もいる。富田さんは、住宅内では他の入居者を主人公に歌詞を作ってプレゼントするなど交流も頻繁、夏はパークゴルフなどで活動的に過ごしているが、裏腹な内面を語る。

気持ちの問題ならまったく変わったね。いやー、孤独がやっぱり一層なんか、深刻化するみたいな感じ、じゃないですかね。外を見てカラスが二羽飛んできて。二人で仲良くしてるのに何で私だけこういう孤独なんだろうなって。よく外にいて考えてますね。いやー、話しする人はいっぱいいるんだよね。だからその点では、よその人よりは話ができるのかなと思うんですよ。うん。私、あの、どっちかっていうと自分で言うのは何ですけど素直なところがあると思うんですよ。うん。でもぼんやりする時間が多いね。まあ楽しいってね。腹の底からあんまり笑うようなことないね。だけど。そこの、そこらへんは人生経

験が足んないのかね。うん感動するようなことっていうのはないね。

このような思いは、入居者の過ごしてきた時代の価値観を反映している。富田さんは自分の弟が両親を自宅で看取ったことを語り、翻って現在の家族の在り方に疑問を呈している。そうした家族の形の変容から、自分の介護については「あきらめるしかない」と語る。

特に、あの、実家を継いでくれた弟にはね、頭が上がらないですよ。両親をちゃんとやっぱりうちで見てくれてね。あの、送り出していただきましたんでね。(孫3人のうち)一人は〇〇に嫁さんに行きましたし。それから一人は△△にいるんです。△△に就職してね。で、長男は、□□の女性と結婚しちゃって。北海道来るんだか来ないんだか。困った家族になってきてばらばらで。私強く言ってるんですけど家っていうのは、何代もね、あの、過ごすのは家であって、俺時代で終わるっていうのは家でないんだって話してるんですよ。けども何か、あんまり言うこと聞いてくれないね・・・。

悩みは私がああ、んー、全然ね、何もできなくなった時に、どうしてくれるんだろうっていう悩みはありますね。息子たちなんて来て見てくれるのかなって思いますね。いやもう、ここにすべてを任せるほかないと思いますね。うん。できるだけことはしていただきたいと。あとは諦めると。すべて。

2-2-4 住宅内の新たな役割の自覚とコミュニティの形成

高齢者住宅への入居後は、安堵とともに徐々に環境になじみ生活に落ち着きが出てくる。同時に他の入居者や住宅の管理運営体制、住宅の職員に対する各々の感じ取り方により、対処の仕方を考えるようになる。入居者は、自分に対しての職員の接し方や日常的な支援体制については心身ともに安心できる場と評価しながら、入居者同士の交流においては消極的な側面を見せる。それは今後の人生を過ごす場として、面倒を避け平穏な場にしておきたいという防御の姿勢である。また住宅の管理運営体制に対しては、進言をためらう様子が見られる。

【入居者同士の交流に対して】

・なんかこう一軒になってるんですけどね、こう続き長屋みたいなもんですよね。そうすると、ゆったりゆわなとかね。些細なことでもね、ありますし。入った当時はやはりこう、皆さん分からないから、夕食をもうね、ちょっと、いろんなお話こう、したりしてたんですけどね。今でしたらもう入って5年もたちますから、前、お子さんは何人いるとか何していたとかっていうのみんなわかってしまってますよね。ですから、あまり深く関わらない方がが良いんじゃないかなーと思って。私も関わってほしくないですからね。だからそれなりに、こう、表面は合わせてるっていう感じでちょっとのことぐらいでしたら目をつぶってね。自分が言わなければやっぱりね、いいんだと思うんですけど。言われても言わないほうが良い。（簗島さん）

・みんなやっぱりそれぞれにあの、隠れた人生を持っているからあんまり公表したくないんじゃないですかね。私みたいにあけっぴろにね、ものを言う人っていうのはないような感じするもんね。コーヒー1杯で3時間もいてくるんですけども。何もあんまり、話はね。当たり障りのないね。あんまり聞いたって為にもならないような話しかないですね。（冨田さん）

交流に対して消極的な要因の一つとして、認知症等加齢に伴う様々な症状をもつ人々との共同生活の困難という側面もある。

ここにいとね、やっぱり来たくて来たくてね。私とね、お友達になりたくて。だけどいやなのね。あんまりね、入れすぎるともいやなんですよ。うん。結局こういうところにいとね、あの、自分ちみたいに入出入りされるでしょ。うん、あんまり入りすぎて親しくなりすぎるとだめなんです。区別がつかなくて。黙って入ってくる。したからなるべくしゃべらないようにしてます。どっちかがやっぱりね、頭の病気の方が多くて。（須藤さん）

また入居者の要介護度の幅広さが、交流困難の要因となる場合も見られる。

（入居者同士の交流は）あんまりないです。1週間に1回、歌の。プチデイとい

うか、リハビリの先生とここの人達が集まって歌を歌うという。金曜の午後、来れる人だけね、重い人が一杯いるのでね。皆で声を出してという感じ。(小川さん:ケアマネ談)

この結果、住宅内でのコミュニティの形成は、個々の入居者対管理者・相談員・(介護)職員に留まる傾向にある。

- ・〇〇さん(相談員が)なんかしょっちゅう声かけてくれるんです。これはありがたいですね。こういう人 5、6人いれば、私全然寂しくないんだけど。(冨田さん)
- ・ヘルパーさんが1日に、1回か2回ぐらいお茶もって参りますからね。その時に話したりしますね。(他の入居者との交流は)あんまりね。(須藤さん)

【住宅の管理運営体制に対して】

私はね、言えばね、やっぱりお料理がね。素人がやってますでしょ。お腹悪くする時もあるね、(聞き取れず)時もありますよ。したから選んで食べるようにして、だから調理師さんにね、私残しますけどね、我慢してくださいねって言ってあげてるんです。うん。お肉ね、かたいからね、塩入れて、お酒入れて、揉まなきゃだめなんですよって〇〇さんに教えてあげたかった。もっともっと教えたいけどなんか出しゃばるのも悪いなーと思って。だからなるべく味のつかないものだけね、取って食べるようにしてますよ。そして私のとこにね、言いにくるんですみなさん。だから私教えてあげるんです。おばあちゃんあげる(吐く)からね、あの料理ね、やめたらどうですかって私、言ってあげるんですよ。心を鬼にして。嫌われてもいいから。言ってあげたんです。したらやめてくれたお料理もあります。言うのも大変だわ よ。みんな言えないでいるんです。みんな言って言ってってこう私に言って。私の言うことならね、聞いてくださるから。(須藤さん)

入居者として集合住宅でのルールを守る義務があると認識しながら、それぞれの生活スタイルに沿って自由に過ごしたい半面、職員の負担を慮

る言葉も見られた。住宅管理者も入居者の便宜を図ることで、ともに生活を創り上げようとする動きがみられる。

いやあ、こここうしてほしいって、私らのね、あれでは限界あるような気がするからね。あんまり希望。例えば、あの、風呂なんかもね、あの、男女別々にしてくれたんですよ。それで大変なもう、感謝ですよ。いや、それはそうしてもらうんならね、寝際に、あー、今日は眠れないからちょっと風呂行きたいってね。入れるし、それはいいことだねって言ったけど。職員どうするのさって聞いたわけさ。職員はね、そんな8時だの9時まで、あの、つかまえている人いるのって話したんですよ。だから、それはいいわっていう話したんだけどね。そしたらこないだ施設長がね、「いや、〇〇さんあんた風呂、あの、8時頃までするか」って言うんですよ。いやあそれは感謝するけどなあって話してね。（富田さん）

一方で、高齢者住宅という新たな生活の場では、積極的に役割りをもつことの重要性を認識したり、管理者等とともに住宅内コミュニティを創っていくのも入居者である自分たちの役割と自覚する様子を見せる入居者もいる。それは入居者本人のアイデンティティを保つことに貢献している。

ヘルパーさんは皆新しいから苦勞してるんですけど、やはりそれなりの協力をね、そんなにしなくていいよ、ヘルパーの仕事だからと言われるけど、一緒になってるのも大事ですね。まかせっきりというのは、今はそういうことではなく相手の気持ちを考えながら生活するというね。中にはそうでない人もいるけれど。こういう所に入る人もね、知らない世界に入るようだから何か勉強して頑張ってるべきだなと入ってから考えますね。・・・一番安心なのは、この年になってお世話（建物内でお花を飾ったり、自分の作品を展示して居心地を良くすること）できるということは。関係ないことまで、このマンションでお花飾ったり、娘にそんなことしなくてもといわれるけど。（安藤さん）

実際に特技や趣味を持つ入居者の強みというべきものも見られたが、他

の入居者とともに行うことにはスペースや費用面で課題が残る。

- ・自分のこれを人に教えてあげるといふのをしたいですね。マネジャも「まだしないの」というけど、これだけの広さしかないでしょ。2階にも少し物を置く場所をもらっているの、だからおひなさまでも何でもみな寄付しましたよ。だから〇〇だけ教えてあげようと思って頑張ってるんだけど、これはもったいないと思いますよ。お金はかかるけど、やり方さえわかればできるからね。(安藤さん)
- ・おかげさんで私ずっと△△やってたんですよ。××でなくて△△っていうのをやってたんですよ。△△を作ったりなんかしてたんですよ。・・・それで結構ね、一人で楽しめるんですよ。あの、つまらないお話ししてるぐらいならね。いや。しませんかって私(聞き取れず)たんですけどもね。みんな目が悪いとかね、手が震えるとか言って誰も参加する人いないんです。私はね、あの、記念にね、葉書一枚でも作ったらいいんでないかなと思ってお金なんかいらさないからって言って。そんなの全然見向きもしませんもん。(簗島さん)

2-2-5 地域社会とのつながり

住宅内のコミュニティ形成の動きが一部には見られるのに対して、住宅の入居者と地域の交流は進んでいない。施設同様に入居者の介護度が重くなるとさらに困難になる様子が見られる。またボランティアの訪問は、住宅が地域に開放される一つの形態ともいえるが、自分も地域住民と対等な一住民であると自認する入居者には、一方的に善意を受け取る立場になることにためらいがある。

- ・(近隣との交流は)なかなかありません、車イスの方が多いので、なかなか外に出ていくことは。そこが課題ですね。状態がいい方だといひですけどね。夏になるとリハビリの先生たちが車イスの方をその辺ぐるっと回ってお花見せていただいたり。この時期になるとできないですね。交流が難しいですね。(小川さん:ケアマネ談)

- ・ (ボランティアの催すサロンについて) 私立派な写真撮ってもらったからね、写真代払おうと思ったらとってくれなかったからますますあんた、どうしたらいい? って話だったから何かで、あの、買ってやったらどうって。(富田さん)

2-2-6 入居費用と生活費

高齢者住宅の入居費用には、介護度に応じて、また民間か公的施設であるかなどにより大きな幅がある。入居に伴う費用に関しては、10人中3人は、妻、娘、妹に任せているため具体的な数字は聞かれなかった。共同住宅に住む那須野さんは夫の遺族年金、自分の国民年金に合わせて家賃収入もあり、入居費に心配はないという。もう一方の共同住宅に住む朝日さんの入居費は、国民年金に加えて生活保護からの給付である。また住宅型有料老人ホームに住まう入間さん、介護付き有料老人ホームに住む簗島さんは入居一時金を納入後の月々の支払である。

ええ、それで(自炊なので食費は別にして)、約11万ですか。えっとね、7階ですからね。1700万円だと思ったな。だから今、ほかの高齢者で、もう入居するの金のことやなんかで大変な人たくさんいますからね。(入間さん)

11万くらい(聞き取れず)そしてあの、冬になったら暖房費が1万とか、それから病院代とかほかの方全部、別ですからね。入居金が650万に、それに消費税。(簗島さん)

妻に任せていると語る寺岡さんも支払いは気になるという。

いや不安も、お金の事聞いたら大丈夫だっていうから、一番怖いのはお金があるかどうか、ここの支払い……。

妹に任せていて費用はわからないという野町さんは、住宅選択にあたり自分の支払い能力の範囲に抑えるように妹に依頼したという。

「年金で賄えるだけとってある。年金少しある、国民年金ね。」

またサ高住入居の須藤さんは12万3000円くらいと話すが、年金の他に貯金を切り崩しての生活であり、入居の費用と住宅内のイベント等は関

連しているという。

そうです。貯金を下ろしてね。そして使ってます。だってもうよそ行ったって16万ぐらいするでしょ。どれだけね、こういう所にいれられるかわかんないし、あんまり高い所も入れないからね。そしてここはね、あんまりほらお金のかかることやらないから。他行ったらお金はかかるけど。ええ、旅行行ったり。なんかすることいっぱいあるんですよ。ここはそういうことやらないからね。1年に1回このまわりで、お祭りやるだけだから。

同様にサ高住入居の安藤さんは家族に任せているが、住宅が様々な取り組みを実施しているの、費用はそれに伴ってかかると認識している。

全部おまかせで。22万か24.5万。お姉さん(認知症で別室)なら30万くらいかかるかな。ここは新しくいろんなことやっているから。

自分の年金も十分であり、同居する息子家族の経済的不安もない富田さん(サ高住)はその状況に感謝しつつ、住宅での生活に関わる費用については詳細に把握し説明してくれた。入居前に、住宅への支払い、自由になる生活費も含めてかかる費用を計算し「やっていける」と思い決めたと語る。高齢者住宅の入居費に不安はないが、税金や交際費などで、収支は少し不足という。

あの、全然ね、あの私はお金欲しいともなんとも言われたことないんですよ。自分のお金は自分で使っていってくださいって言われたもんだから。今感謝してるんです。だからここ5年や3年は大丈夫なんです。5か月で85万2千725円引かれてるんですよ。だから、おそらくね。生活費がね、大体6か月で151万円かかっているんですよ。で、月平均すると25万2377円かかっているんですよ。だから年金でね、十分だと思ったんですよ。大体360万もらったんですよ。年金が360万。

それからね、引かれるのが、あの、えー、介護保険8万6千円引かれるわけですよ。それから、えー、医療費。医療費23万1千円引かれるんですよ。それにね、あの、道市民税。道市民税が12万引かれるんですよ。だから今40、2

か月分でね、49万3千円ぐらいかな。4千円ぐらいかな。

いやー、とんとんって、ちょっと足りないですね。特別なこと例えば実家に3万円送ったとか。死んだんで香典送ったとか。娘の、あ、孫の〇〇が来たんで、2万5千円やったとかね。だけどやっぱりちょっと何かあると30万越してしまう。

2-2-7 その他

本調査では、介護サービスの利用状況も調査項目に含んだが、サービス利用場面に関する語りはごく限定的なものであった。また住宅の居室での過ごし方については、「自立」の那須野さん、入間さんは自由に外出、また須藤さん(要支援1)、安藤さん(要介護1)、簗島さん(要支援1)は趣味の活動である。富田さん(要支援2)は他の入居者を主人公にした歌詞の作成や日々の出来事のメモを作成、寺岡さん(要介護2)は現役時代の技術を生かし、室内や厨房で工夫しながら調理をし、住宅管理者とともに楽しんでいる。小川さん(要介護2)は裁縫が得意で刺し子をしたり他の入居者のものを縫ってくれると管理者は話す。夫婦で同居の野町さん(要介護1)はデイサービスの利用が週2回、同じく週2回のヘルパーの訪問があるが、買い物に行くほかは「テレビを見ている」という。共同住宅の朝日さんは80歳までスポーツジムに行ったというが、現在は膝を悪くし無理はできないものの買い物にも出かけるという。

3. 「生活モデル」と高齢者住宅の課題

3-1 インタビュー調査から見えてくるもの

入居者の語りの多くはこれまでのライフヒストリーに集中しがちであった。長期間にわたり築いてきた生活の終結としての高齢者住宅に対するそれぞれの抱く思いの深さが感じられるものであった。新たな生活環

境に身を置くに際し、自分なりの身構え、心構えをもって臨んでいることが語りには表れている。入居者は虚弱あるいは要支援・要介護に該当する身体上の制約をもちつつ、ライフヒストリーから紡ぎ出された価値観・人生観に裏付けされた生活世界に生きる主体である。介護要因に支配されることなく、主体的な個人としての生活展開を高齢者住宅はどのように支えていくことが可能なのか、以下に、語りの結果を整理しつつ方向性を考察する。

入居の経緯のうち、自身の疾病と退院による入居は、本人のみならず配偶者、家族のライフスタイルへも影響を及ぼす。多くの配偶者も高齢であり、退院後の家族を迎え入れる力を持たない。夫婦2人の力を合わせて困難をやりくりして生活してきた経緯があり、どちらか一方が入院前の状態に回復しない場合には残された一方も生活困難に陥ることになり両者のライフスタイルの転換を招いている。高齢者住宅は未だ発展途上にあり、高齢夫婦両者が「安心」を手に入れながらともに暮らすことを容易にするものとはなり得ていない。また家族数が減少している今日では、配偶者以外のやはり高齢の親族が介護者であることも珍しくはない。高齢者の退院後の自宅復帰が不可能であれば、行先として高齢者住宅が選択される場合は多く、入居にあたり迷いや検討の余地がない状態と見られる。さらに独居では、退院時に以前の状態に回復できなければ自宅での生活に戻ること困難である。子世代は仕事の関係から時間的余裕がない、一方の配偶者の親の世話があるなどで、双方の親を介護する余力をもたない。子世代が高齢者住宅への入居を勧める場合も多いなど本人の積極的希望による選択とは言えない状況がみられた。また過疎地からの転居という地域環境による不本意な入居の側面も見られた。一方、家庭不和や介護力をもたない家族からの分離が高齢者の救いとなるケースがあることも忘れてはならないであろう。

入居後は「一人ではない」という点で、一様に安心感を述べていた。

調査対象者の半数が管理者または生活相談員の同席という調査の限界を考慮しても、高齢者住宅への入居はそれまでの独居または高齢夫婦での生活の不安の解消として大きな意義をもたらし、同時にそうした高齢者を介助あるいは見守る家族にとっても大きな安心となっている。

入居にあたっては、高齢者が自分のニーズに照らし合わせて住宅を選択する時間的な余裕がある場合には、転居先の住宅を「生活の場」と捉え、希望する間取り、住宅の所在地、周辺環境、買い物等の生活行動の便利や生活上の楽しみなど、住宅内部にとどまらず生活環境全般についても検討している。また高齢者住宅開設の事業者側の提示するコンセプトを詳細にチェックし趣旨に賛同できることで入居を決めているものもある。

選択の余地が少ないケースでは入院していた病院を通して関連法人の運営する住宅を選択したり、身体症状に合わせて紹介を受けた住宅を選択するが、入居者本人の選択基準の主軸にあるのは入居に関わる費用と訪問しやすいなどの家族の便宜である。自身の経済力の範囲に収まる入居費であることが第一要件であるとともに家族との接触を強く望んでいることが窺われる。また、夫婦の一方や姉妹が先に入居していた例では、住宅の職員に諸事情を理解してもらえる安心感と、その際の住宅側の対応が続く入居の決め手になっていると思われる。

入居後の生活では、不要な摩擦を避けて他の入居者と一定の距離を置く様子が見られる。介護度のレベルとは無関係に、互いに深く関わり合うことを避けたいとする心理が働くようであるが、認知症の入居者に関しては交流を図るのは困難と受け止めている。また住宅内では、自身の強みを生かして、何等かの貢献をしたいと考える入居者もいるが、それらを実現する仕組みは人的・物的ともにまだ整っていない。住宅内のコミュニティの形成は、一部を除いては表面的なものに留まり、確認できるのは、管理者や相談員との限定されたコミュニティの形成である。

入居者は、希望や意見、苦情をかかえても、それを表出することにためらいをもっている。一般的な賃貸住宅においては、消費者保護の観点から借主の「住む権利」が強く保護されているのに対し、高齢者住宅における入居者の権利の主張は希薄である。介護や日常生活支援が関わることにより、それらが支配的なファクターとなって、「住んで生活すること」の権利意識は後退する。加えて家族介護を世代的規範として持つ現在の高齢者は、高齢者住宅への入居をあるべき形として捉えられず、「家族介護」を得ることが困難なための代替措置としてとらえ、そうしたサービスの受け手としての「あきらめ」を受容しているのではないだろうか。またボランティアによるサービスの一方的な受け手になるのではなく、対等な他者との交流を望む言葉からも、生活者としてのエンパワーメントを図る方策が必要である。

しかしながら入居者の中には趣味・特技等で内外を問わず活動の場を広げたいとの意欲をもつ者や、居住する住宅内においても共同生活を創り上げる一員として何等かの役割を持ちたいと考えるものもいる。それらに理解と関心を示し住宅というコミュニティ内で、個性をもつ一住民として住宅内に導きだすのは相談員や管理者の力量であろう⁵⁾。住宅外との交流や関わりをもつことは、現状ではほとんど進展せず住宅内に留まっている(永田 2015b、2015c)が、この点については、住宅間の連携課題として検討すべき問題であろう。

3-2 「生活モデル」視点からみる高齢者住宅の課題

現在の高齢者住宅では、入居者の生活世界は限定され、家族・地域の一員としての生活展開は不十分である。

入居者の状態像が多様化している現状では、一住宅内でのコミュニティ形成を図ることは困難な側面もある。住宅の門戸を開き、他的高齢者住宅の入居者との交流を促進するなど、住宅の垣根を超えた人的交流が

必要である。それらの支援のためには、相談員などの住宅職員のみならず新たな交流や情報交換のための人材の配置を要するものである。また要介護高齢者の移動介助を伴うことを想定すると、併設する介護サービス事業所の職員等の職務内容の見直しや再編も検討しなければならないであろう。

世代の特徴として家族規範をもつ入居者もあり、住宅内に家族の訪問や滞在を可能とする方策が有効であろう。またそれは、地域住民に対しても門戸を開く形であることが望ましく、町内会行事への参加に終始しない新しい交流の形を模索する必要があるのではないだろうか。地域住民としての生活に日常的に提供されている地域社会の機能一買い物、談話、食事、娯楽、保健、医療、その他さまざまなサービスの利用—が、高齢者住宅内に持ち込まれ地域住民もともに利用が可能であること、さらに高齢者住宅の入居者も住宅外で提供されるそれらの機能を地域住民と同様に利用することが可能であること、それらが実現されることにより、高齢者住宅の先進国にみられるような「住宅に基盤を置いた高齢者福祉」(松岡 2009)に近づくことができるのではないだろうか。

入居者の介護度等、身体状況の段階に応じて、また生活歴や趣味嗜好に応じて交流が可能となるような高齢者住宅間のコンソーシアムの形成が望まれる。家族交流、友人との交流、外出、買い物、趣味活動などが、入居者本位で可能となるような移動手段や場の確保をはじめとして、買い物や食事(交流を伴う)、その他の諸活動などの生活機能の住宅内整備と、住宅間の相互利用、地域住民との相互利用が図られるならば、超高齢社会の新しい地域コミュニティの創設につながるものであり、高齢者住宅はその足掛かりとなり得るのではないだろうか。

おわりに

本稿は高齢者住宅の入居者の語り限定して考察したものである。入

居者自身の思い違い、記憶の不確かさは否めないが、家族との生活や住み慣れた地域を離れての入居が高齢者に与えるインパクトは表出されていると考えられた。また調査は入居期間の長短に関わらず実施しているため、調査後に他の入居者や住宅職員との関わり等の中から形成される新しい関係性、住宅内文化といったものが徐々に形成され住宅独自のコミュニティの形成がゆっくりではあるが進んでいることも想定される。

しかしながら、高齢者住宅間の相互交流、地域と高齢者住宅間の交流、さらには交流にとどまらず高齢者住宅とその入居者が地域において強い存在感を示し、地域社会における不可欠な機能を発揮するようになるまでの道のりはまだ遠い。高齢者住宅の登録制度が創設されてまだ5年を経過したところである。介護サービスを受ける、受けないに規定されず、それぞれが一人の住民として自由な生活を送るためには、高齢者自身にも入居者としての成熟が期待され、同時に高齢者住宅に関わる制度政策の改善も期待したいものである。

なお本調査では入居者とは別に、住宅管理者または生活相談員へもインタビュー調査を実施しているが、入居者の家族へのインタビューは実現していない。今後は家族の思いや実態についての調査も必要と考えている。

謝辞

本調査にあたり、快くお話しをお聞かせいただきました入居者の皆さまに厚く御礼申し上げます。また対象となった住宅の管理者・生活相談員の皆様には、入居者の皆様からの承諾をいただくなどの便宜を図っていただき、さらに多忙な中を、調査に付き添い不明点の補足をいただくなどのご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))の助成を受けて実施した研究成果の一部である。

「サービス付き高齢者住宅入居者の介護サービス利用特性とLSAの機能と役割」

課題番号:25380829、研究期間:平成25年～平成27年、研究代表者:
永田志津子

【註】

- (1)厚生労働省老健局長の私的研究会である「高齢者介護研究会」の報告書では、「高齢者が安心して住める「住まい」への住み替えという選択肢を提示することは重要な課題」であるとし、住み替えの形の一つとして「要介護状態になってから、「自宅」同様の生活を送ることのできる介護サービス付きの「住まい」に移り住む」ことを挙げている。『高齢者介護研究会報告書』「2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」全国介護保険担当課長会議資料(平成15年9月8日開催)
<http://www.wam.go.jp/wamappl/bb05kaig.nsf/vKaigoHokenKanren/4dba4070c5322b8249256d9b001abc9d?OpenDocument>
- (2)サービス付き高齢者向け住宅等に関する先行研究は次のような報告があるが、実態把握、住み替えのきっかけ等の量的調査、あるいは持続可能なビジネスモデル等に関するものが主になっている。
 - ・平成24年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「サービス付き高齢者向け住宅等の実態に関する調査研究」財団法人高齢者住宅財団 平成25年3月
 - ・「高齢者等が支援を受けながら住み続けられるサービス付き高齢者向け住宅など、高齢者の住まい方とその支援方策等に関する調査研究事業 報告書」国立大学法人東京大学高齢社会総合研究機構、平成25年3月
 - ・「急増するサ高住の実態と課題」三井住友信託銀行 調査月報2013年10月号。
- (3)日本における高齢者住宅の定義があいまいであることはこれまでも指摘されている。ある時は「施設」と「住宅」の利用者を含めて使われたり、ある時は「住宅」のみを指すものとして使われている。松岡は、デンマークにおいては、「高齢者住宅(狭義)」が施設と統合されて公営賃貸住宅として住宅政策下にあることから施設を含める時には「高齢者住宅(広義)」と使い分けている(松岡2009)。

- (4)札幌市の調査では高齢者の80%が「現在住んでいる地域に住み続けたい」と考え、身体が弱くなったりした場合の生活場所も「現在の場所」と答えたものが最も多く(42.5%)、次いで「住み替えにより在宅での生活を続けたい」(15.4%)と答え、「施設で暮らしたい」は19.0%である。『高齢社会に関する意識調査(65歳以上対象)報告書』札幌市、2015。
- (5)高齢者住宅のうち配置が義務づけられているサ高住の生活相談員に関する業務内容は不明確であるが、相談に対する「助言」に留まることが指摘されている(永田 2015a)。

【参考文献】

- 高橋正「「終末期ケア」を捉えたサ高住事業の事業性」『サービス付き高齢者向け住宅の意義と展望』大成出版社 2013、p78。
- 永田志津子「高齢者向け住宅における生活相談業務に関する実証的研究」『札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要』第45号、2015a、p59。
- 永田志津子「サービス付き高齢者向け住宅における主体的生活展開の可能性～生活支援サービス提供と地域交流の取り組み状況から～」『札幌大谷大学社会学部紀要』第3号、2015b。
- 永田志津子「地域包括ケアシステムとサービス付き高齢者向け住宅における生活相談員の役割」『地域ケアリング』vol.17 No11、北隆館 2015c、p70-75。
- 広井良典『ケアを問い直す』ちくま新書、2001。
- 松岡洋子『デンマークの高齢者福祉と地域居住』新評論、2009。

(ながた しづこ，札幌大谷大学社会学部教授)